

変化の早い中国を体験しよう （上海日本商工クラブ）

はじめに

米国のトランプ大統領の関税政策に各国が振り回される日々が続いている。一方で、中国では超安定した政権により、2021 年には 2049 年の建国 100 年に向けた国のビジョンが示され、2035 年の中間目標が設定されている。日本では、本年前半はコメ高騰とトランプ関税の話題が日々追われる中で、中国经济の成長鈍化と対米強硬姿勢など、中国に関する報道は北京の中央政府の発言を中心に政治、経済、国際関係にスポットが当てられている。

ここでは、筆者が見た日本ではあまり報道されない中国の姿の一部を紹介したい。

自動運転

大阪・関西万博では空飛ぶ自動車や自動運転バスが目玉の一つとして採り上げられているが、なかなか順調には進んでいないようである。上海では数年前から、自動運転タクシーやバスの実証実験が進んでおり、既に筆者も上海と周辺で 3 カ所の自動運転タクシー・バスに試乗したことがある。一部の地域では、ロボタクシーの名称で実用化されており、自動運転バスも商用化に近づいている。各地区が自動運転システムの競争をしながら、成果が上がったものから横に展開するということになるのだろう。

また、上海港はコンテナ取扱量では、圧倒的に世界のトップとなっているが、埠頭のコンテナ運搬車は無人運転なので運転席はなく、リモートコントロールのクレーンで無人運搬車にコンテナが詰まれ、ほぼ無人で荷捌きが行われている。

中国では、一部エリアの規制を緩和して、ビジネスを活発にする自由貿易試験区（自貿区）の制度が、2013 年に上海の浦東新区で始まり、2024 年までに全国に 22 カ所の自貿区が設置されている。各地の自貿区がそれぞれの規制緩和を推進する中で、様々なイノベーションに向けた取り組みを行っており、自動運転車の実証実験もいくつも行われている。



臨港新片区のロボタクシー

コンテンツ

今年の中国アニメ映画「哪吒（ナタ）2」の興行収入が、150 億元（約 3,000 億円）を超え、アニメ映画の興行収入で世界歴代 1 位になったことは日本でも報道され、ご存知の方もいることと思う。しかしながら、「ナタ 2」は日本では少数の映画館でしか上映されておらず、また、上海でも実際に映画を見た日本人は多くないようである。業界の人によると「ナタ 2」の興行収入の約 95%以上は中国国内との

ことであり、海外の興行収入は5%もないそうである。さらに、中国国内でも北京や上海などの大都市ではなく、3線都市（※）以下の人々が多く鑑賞したとのことであり、中国市場の大きさを感じられるデータである。さらに、ゲーム市場でも昨年は「黒神話・悟空」が世界的に大ヒットしたとのことであり、中国のコンテンツ・ビジネスは、巨大な市場とともに大いに注目されている。

筆者は、昨年10月に四川省成都市のコンテンツ・ビジネスの視察会に参加する機会があり、ゲーム開発企業、E コマース企業が集まる開発区、さらにIPグッズのショッピングモールなどを視察した。若者が中心の企業では、新しいゲームを開発している姿などがイキイキと感じられた。

日本では、インバウンドの活況とともに、日本のアニメや周辺のキャラクター・グッズなどが世界に受け入れられている印象があるが、中国の市場規模から考えると上海や大都市だけでなく、まだまだ受け入れられる余地があるものと思われる。



成都のゲーム開発会社視察

（※）中国の都市には1線から5線までのランク付けがあり、2019年には1線に近い2線都市が新1線都市となり、6段階に分けられている。1線都市は、北京、上海、広州、深圳の4都市、新1線都市には、武漢、重慶、杭州、成都など15都市がある。3線以下の都市は、国際的な影響力はないものの、今後の市場の発展が期待されている。

コロナ後の中国観光

近年は日本から中国を訪れる観光客は非常に少なくなっている。中国はコロナ禍で国を跨ぐ往来を厳しく制限し、2023年からようやく訪中ビザの取得が容易になった。さらに、昨年11月末からは、日本から中国への訪問のビザ免除プログラムが再開し、現在はノービザで30日間の滞在が可能である。既に中国では、38カ国に対してビザ免除政策を実施し、54カ国には240時間のトランジットビザを免除している。中国政府の発表では、2024年の訪中外国人は延べ2,694万人となり、前年比96%増であった。2025年1～3月には921万人が中国を訪れ、前年同期比で約40%増となっている。近年の中国では、国内観光が大変活発になっているので、観光地でも外国人観光客はあまり目立たないが、中国も観光大国の一つである。

中国には、数多くの世界遺産と豊かな自然の景観や歴史的遺跡がある。1980年代には日本から多くのパッケージ旅行が催行されていたが、最近では多くの観光地が、労働節、国慶節の連休や夏休みには、国内の旅行客で混雑している。現在、中国政府では、外国人観光客の誘致を進めており、上海市では文化旅游局の協力により、春秋旅行社を中心に日本人向けのツアーの紹介が行われている。



上海映画城（近代上海の街並みを再現）

余談になるが、ロシアのウクライナ侵攻により、日本や欧州の多くの航空会社がロシア上空を飛行できないことから、日欧間は南回りの飛行となり、時間もかかり、航空運賃も高くなっている。一方で、中国の航空会社はロシア上空を飛行できることから、欧州各都市から上海経由で日本に行く観光客が多くなっている。その逆に、中国を経験している日本人も欧州に行くには、上海から中国の航空会社の飛行機に乗るほうが、時間も短く、航空チケットも安いということである。上海から日本への航空便には欧州から訪日する観光客が多く搭乗している。

まとめ

今年の日本では、大阪・関西万博の開催もあり、本年4月の訪日外国人は390万人を超え、そのうち中国からは約76万人となっている。最近の訪日日本人数がどれくらいになっているか分からないが、中国から日本に来る中国人が圧倒的に多いことは間違いない。外務省の海外在留邦人数調査統計では、中国在留邦人は、2012年の約15万人から、2024年には10万人を切るまでに減少している。中国では在留邦人の最も多い上海市でも、2012年には約5万7千人（ただし、在留届を出していない人も多く、当時は10万人の日本人がいると言われた）から、2024年には3万5千人を切るころまで減少している。

このように日本に行ったことがあるという中国人は年々増加する一方で、中国に行ったことがあるという日本人は年々減少しているようである。さすがに1980年代の北京の天安門広場が自転車で通勤する人で埋め尽くされているイメージを持つ人は、ほとんどいないものと思うが、報道によるイメージだけでなく、中国の変化やそこに生活する人を自身の目で見て、中国とどのように付き合えばよいか、自分で判断することが重要だと思う。皆さんの海外旅行の候補先に是非入れていただきたい。

おまけ

昨年5月に中国の江蘇省南京市に在住の日本人ドキュメンタリー監督である竹内亮氏の映画「再会長江」が日本で公開された。中国でも公開され、上海日本商工クラブの業種別部会の一つで、映画製作と自身が中国に関心を持った経緯などを講演していただいた。等身大の中国を発信する日本人として、チベットの長江（揚子江）の源流から上海の河口に至るいくつかの都市を10年振りに訪問して、現地の人との交流を記録した映画である。10年の時間は、監督本人の成長とともに、成功して再会した人、変わらずに同じ仕事をしている人などを映しだしており、飾らない中国を実感でき、中国を旅行してみたくなる映画である。以下にサイトのURLを記しておく。

<映画・再会長江のサイト>

<https://www.saikaichoko.com/>

上海日本商工クラブ

<https://www.jpcc-sh.org/#/index>

（上海日本商工クラブ 事務局長 中村 仁）